九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国西南少数民族の創世・民族起源神話にみる「唖児」話素

末森, 明夫
国立研究開発法人産業技術総合研究所

https://doi.org/10.15017/4772326

出版情報：障害史研究. 3, pp.53-57, 2022-03-25. Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

障害史研究　第３号
2022年３月 発行

《史料紹介》

中国西南少数民族の創世・民族起源神話にみる「唖児」話素

Mute Children Motifs Included in Creation/Ethnic Origin Myths in Minorities in Southwest China

末森　明夫
SUEMORI Akio Ph.D. of Molecular Biology
（国立研究開発法人産業技術総合研究所）
（National Institute of Advanced Industrial Science and Technology（AIST））

要　旨

本稿では西南少数民族の創世・民族起源神話にみる「唖児」話素と、異類婿説話や創世神話にみる「奇形」話素や「異界」話素を対照し、西南少数民族の創世・民族起源神話にみる「唖児」話素の背景を可視化し、障害史に資することを試みた。

ABSTRACT

This paper describes mute children motifs included in creation/ethnic origin myths in minorities in Southwest China, which are compared with motifs of a nonhuman-husband, deformed children, or the underworld. The consideration should contribute the history of disabled people from a viewpoint of silence, which does not necessarily imply to be deaf-mute.

１．はじめに

中国西南少数民族に幅広く分布する創世・民族起源神話は同胞配偶型洪水神話に属するものが多く、「唖児」話素（motif）を含むものもみられる。一方、「唖児（＝物言わぬ子）」話素も記紀神話を始めとする東アジアに広く分布している。川谷（2018）は記紀神話にみる「物言わぬ子」話素と世界各地にみる異類婿説話の共通点を論じたものの、西南少数民族の創世・民族起源神話にみる「唖児」話素には言及していない。

本稿では西南少数民族の創世・民族起源神話にみる「唖児」話素と、異類婿説話や創世神話にみる「奇形」話素や「異界」話素を対照し、西南少数民族の創世・民族起源神話にみる「唖児」話素の背景を可視化し、障害史に資することを試みた。

２．中国西南少数民族・民族起源神話の「唖児」話素

中国の西南少数民族には同胞配偶型洪水神話が広く分布しており、数量的に多くまとまりのみられるものには闘争型洪水神話[1]と予告・懲罰型洪水神話[2]がある。特に予告・懲罰型洪水神話には「唖児」話素を含むものがみられる。表１に「唖児」話素を含む創世・民族起源神話の主な要件を記す。

表１からは「唖児」話素は彝族と納西族を中心に分布していることが窺われる。井上（2015）は西南少数民族の洪水神話に関し、「南部山地居住農牧民文化圏（漢・チベット語系チベット・ビルマ語族彝語支の諸民族）では同胞配偶型とともに天女婚型の洪水神話が多くみられる。西部中部高原農牧民文化圏（漢・チベット語系チベット・ビルマ語族チベット語

支の諸民族）では天女婚型の洪水神話がみられる。予告・懲罰型洪水神話は大・小涼山を中心とする彝族およびその影響を受ける彝語支諸族ならびにその近隣民族の間に分布し…」と述べている。

ただ闘争型洪水神話を中心とする創世・民族起源神話には「天女婚」話素を含むものはあまりみられない。予告・懲罰型洪水神話を含む創世・民族起源神話は「兄妹婚」話素が中心になっているものと、「天女婚」話素が中心になっているものに分けることができ、いずれも「唖児」話素がみられる。

「唖児」話素は主に「洪水で生き残った男は天女と結婚する（＝「天女婚」話素）（あるいは、洪水で生き残った兄妹は結婚する＝「兄妹婚」話素）。生まれた子供たちは唖であった。ある日、子供たちは竹の炸裂音を聞き驚いて、（それぞれ）異なった言語で発声し、それぞれの地方へ行って、それぞれの民族の始祖となった。（井上 2015：54）」というようなものである。

もっとも「竹の炸裂音を聞き」の箇所は他の内容に替わっているものも少なからずある。また「３人」という数字も固定的なものではなく、新たに生まれた民族も多様な組み合わせがみられる。すなわち「唖児」話素が西南少数民族にみる創世・民族起源神話に取り込まれてきた経緯が多岐に渉ることが窺われる。

３．史料批判

「唖児」話素の納西語翻音翻字資料（黒澤 2007：187）をみると、単に「不語」という表現が用いられており、「唖」という語が用いられているわけではないことが窺われる（表２）。

ただ中国語による翻刻資料では「不語」や「不言」に加えて「唖」という字も用いられており、「唖」という字がが現在の「聾唖」と同じ意味を示しているかどうかに留意することが望まれる。すなわち西南少数民族の創世・民族起源神話のテクストにみる「不言／不語」と「唖」に通底する「（声が聞こえない）沈黙」という事象をどのように解釈するのか、身振りや手話で激しく手を動かしていても「沈黙」という事象として捉えるのかというように、声という生物学的事象や聾唖という医学的事象に対する距離感が問われることになる。しかし本稿では現世界にみる声とは別に、異界ないし異類界にみる沈黙という事象を焦点化することにより、西南少数民族の創世・民族起源神話にみる「唖児」話素の背景を前景化することを試みる。

４．異類婚神話

西南少数民族の創世・民族起源神話にみる「唖児」話素とは別に、記紀神話や風土記にも「物言わぬ子」話素がみられることは夙に知られている（多田 1997）。川谷（2018）は「物言わぬ子」話素と世界各地にみる異類婿説話の共通点を論じ、記紀神話にみるホムツワケ説話や風土記にみるアヂスキタカヒコネ説話は「物言わぬ子」話素を含む異類婿譚から派

表１　中国西南少数民族にみる予告・懲罰型洪水神話の「唖児」話素

収集対象民族	婚姻型	唖児数	派生民族	文献
彝族	天女	３人	彝族・蔵族・漢族	馬（1984）
彝族	天女	３人	蔵族・漢族・彝族	沈・郭（1985）
納西族	天女	３人	蔵族・納西族・白族	和（1980）
彝族（双柏県）	兄妹	36人	彝族・哈尼族・漢族・傣族	郭・陶（1981）
彝族（昭通永善県）	兄妹	３人	彝族・苗族・漢族	雲南省編輯組（1986）

表２　納西語テクストにみる唖関連記述

Tee	sso	seel gv	siq	seil,	sso	chee	seel gv	tee,	geezheeq me	gvl	zeel	wei,
それ	息子	3（人）	生む	（接２）	息子	これ	3（人）	それ	話す（副１）	（助１）	（末５）	（末７）
それで、息子３人を生むと、この３人の息子は、しゃべれないと言うんだなぁ												

生したものである可能性を示した。尤も川谷（2018：16）は「彼ら[3]が口を利けなかったのは、異類として生まれたからであり、それ以外の理由はないと思われる。」と述べているものの、なぜ異類として生まれたものは口を利けないのかという点には踏み込んでいない。

日本の文字史料にみる《異類の不言》という概念を包摂する記述を渉猟すると、次のような文献がみつかる。鎌倉時代初期に編まれた『金塊集』は「ものいはぬ四方の獣すらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ」という句を載録している（中西 1995）。この「ものいはぬ」は「獣」に係っており《異類の不言》を意味しているものとみなし得る。

黄（2013）は中古中世日本語における「桃李不言」の受容過程を論じ、「不言」は《異類の不言》を行間に示す機能を包摂していた可能性を提示している。また近世中期に書かれた『今昔百鬼拾遺』「人面樹」の「山谷にあり。その花、人の首のごとし。ものいはずしてただ笑ふ事しきりなり。しきりにわらへばそのまま落花すといふ。」という行にみる「ものいはず」も《異類の不言》という概念を包摂しており、異類が動物だけでなく植物にも渉っていたことが窺われる。

5．異界と現界

新島（1994）は西南少数民族における出産や成人に関する儀式を調査し、「滄源県の佤族…子供の誕生は別の世界からの転生であり…彼岸から来た赤子は陰陽の両界にまたがった存在で、体は「鬼」と人の間にあり、「鬼」気がまだ残っている。…雲南の少数民族にとって、人と鬼、肉体と霊魂は共棲していると考えている…」と述べ、西南少数民族にみる《異界観》を明らかにしている。

山口（2013）は石川准著『至福千年』に記されている「ものいはぬ子」になった徳の文芸的分析を通して、「ものいはぬ」にみられる現世と異界の越境性を論じている。このような分析からは、《異類の不言》の他に《異界と現界の境界にみる不言》という概念が存在し得ることが窺われる。

また赤子に限らず、『日本書紀』「神功皇后紀」や「天武天皇紀」にみる憑依に伴う「不言」も《異界と現界の境界にみる不言》を物語っているものと考えられる[4]。

6．創世・民族起源神話の「単眼・片足・縦目」話素と「異常出産」話素

西南少数民族の創世・民族起源神話は闘争型洪水神話と予告・懲罰型洪水神話に大別できるものの、闘争型洪水神話に属する創世神話には、独眼人、片足、盲人、縦目といった異類が登場し、民族起源神話は縦目の後に登場する横目の同胞婚から始まる例が多い。さらに闘争型洪水神話に属する民族起源神話は同胞婚話素および異常出産話素により構成されるものが多く、異類出産は肉塊、瓜、不具児、異形など多岐に渉る。さらに記紀神話にみる蛭子説話と東アジアや東南アジアに広くみられる民族起源神話の異常出産話素との共通性を指摘する文献もある（君島 1989、伊藤 1991）。

創世神話に登場する異類や異常出産にみる異類は、不完全なものから現界の人類・民族に近いものへの変化を譬喩したものとみなす解釈も少なからずある。特に伊藤（1980）は「人類の祖となるべきこの物語の主人公が配偶者を選ぶ際の目安となっているのが、文字通り、相手の女性の眼の形相にあった。…伴侶選別の基準とされた縦目と横目にこそ意味がこめられていた。そして眼のシンボリズムをそこに察知できるのである。…眼のシンボリズムを道徳的に見ようとする…人格的象徴を眼の形態に見出す…」と述べ、創世・民族起源神話にみる変化が「異類の外見」から「人の像容を規準とする道徳的価値観」へと変容している可能性を指摘している。

藤崎（2007：32）はナバホ族創世神話にみるナドレ（＝男でも女でもない存在、両性具有者もしくは間性）が「地下世界から現在の世界に出現過程での男女の分離のエピソードにおいて活動するが、それ以外の場面ではほとんど登場しない（藤崎 2007：27）」ことに着目し、「ナドレ」は普通の男や女とは異なる有徴化された存在であり、その本質は「変化・移行」にあることを論じている。

折口（1938）は言霊信仰における沈黙の問題を論

じ、「精霊の神に対する徹底した反抗。それは沈黙という形で自分の言葉を護る行為であった。」と述べている。これを受けて、中村（1990）は「言霊の言とは元来『神言（語）』を指したからである。『神言（語）』は人の口を借り伝えられたが、人語はその時、沈黙という形で存在せざるを得なかった。」と述べ、異界、あるいは異界と現界の境界においては精霊ないし人は沈黙せざるを得ない状況を指摘している。

このように、異類、あるいは現界の人とは異なる像容を持つものを変化自体のシンボリズムとし、創世・民族起源神話に位置づける例は、世界各地の創世・民族起源神話にみられる。すなわち「唖児」話素も沈黙という事象を異界から現界への越境という変化を示す「声のシンボリズム」として位置づけるものとも考えられる。

７．身振り

「声のシンボリズム」は「なぜ異類として生まれたものは口が利けないのか」という問いに対する逆説的解釈を生むことにもなる。例えば異類婿説話に属する中国の『蛙息子』では、蛙は身振りである南方人との交渉をおこなっている[(5)]。西南少数民族の創世神話には『天神的唖水』（新 1985）という譚があり、冒頭では「動物は昔は話すことができた。」と述べている。また基諾族の創世神話には「大昔、人、獣、樹、草、水などがまだ話ができていた頃、互いに助け合わず、罵り、争い合う…」（馬 1993）と述べている。

異界と現界の境界における沈黙は、声を発しない状態から声を発する状態への変化を示しているのではなく、身振りないし手話言語のような視覚言語（＝声を用いない状態）から音声言語（＝声を用いる状態）への変化を意味している可能性も皆無ではない。または、異類が身振りを使えなくなり、現界から消えていく状態を暗示する沈黙なのかもしれない。

８．文字喪失神話と「抵抗の民族」

大林（1975）は世界各地の文字喪失神話を緝輯し、民族に元々あった文字が食べられることにより失われるという内容の文字喪失神話が「ヒマラヤからアッサム、ビルマを経てラオスに至る山地農耕民およびボルネオ」に分布していることを明らかにした。斧原（2002：９）は西南少数民族の文字喪失神話を分類し、文字喪失神話を「強力な漢字文化の浸透に対する、彼ら無文字民族のささやかな抵抗」と位置づけている。野本（2019）は近世・近代の彝族支配層における漢文化の影響を論じており、西南少数民族の支配層にみる漢文化の影響に伴う事象が創世・民族起源神話にも投影された可能性を指摘している。

「唖児」話素に目を転じると、表１に示すように、唖児たちから派生した民族は西南少数民族にみる各族のほかに漢族が加わっている例が少なくない。すなわち「唖児」話素にも漢文化の浸透の一端が窺えるとともに、「唖児」という「声のシンボリズム」には漢文化の浸透（＝漢語の影響）に対する西南少数民族のささやかな抵抗、いわば民族的自我ないし民族語を護ろうとするシンボリズムも包摂されている可能性が窺われる。

竹沢（2005：151）は「人種概念が「小文字の race」「大文字の race」「抵抗の人種（Race as Resistence（RR））」という三つの位相によって一つの球をなすように成立している」と論じている。人種を民族に置き換え得る場合、「唖児」話素にみる沈黙は「抵抗の民族」という位相のシンボリズムに例えることもできよう。

９．おわりに

本稿では西南少数民族の創世・民族起源神話にみる「唖児」話素に出る沈黙に焦点をあて、沈黙が「声のシンボリズム」によりもたらされたものである可能性を述べた。しかし「声のシンボリズム」により顕現化する沈黙は、声の抑圧という面だけでなく、異類の言葉の抑圧、さらには抵抗の民族による民族語の抑圧といった多様な位相を包摂し得るものである可能性が窺われた。

さまざまな文献にみる「唖」という漢字にあたるときは、「唖」は単に「聾唖」という因果関係を包摂する位相だけではなく、多様な背景をもつ「不言」という位相が混在する多義語であることに留意する

ことが望まれよう。

註

（1） 闘争型洪水神話は主に南部山地焼畑耕作民文化圏や南部河谷居住水稲犂耕民文化圏にみられ、天上の雷公と地上の神人の争い、兄妹婚、肉塊による民族起源といった話素を含む。

（2） 予告・懲罰型洪水神話は主に南部山地居住農牧民文化圏や西部中部高原農牧民文化圏にみられ、耕地復元話素、兄妹婚ないし天女婚、唖児による民族起源といった話素を含む。

（3） ホムツワケやアヂスキタカヒコネを指している。

（4） 川村（2006）は近代初期（明治時代）以降に「狐憑き」のような「憑依」事象が個人の病としての精神病へと読み換えられてゆく推移を論じている。また、銭・岸（2005）は近代中国人における《言》と《不言》の葛藤を論じている。しかし、これは「近代における個人の内部における《言》と《不言》の葛藤」であり、近代自我と言語の関連性を反映した問題に他ならない。

（5） ナバホ族の創世神話にも神々が身振りで地上の人に何かを伝えようとする話がみられる。

資料

雲南省編輯組編（1986）「伏義兄妹伝人種」『雲南少数民族社会歴史調査資料匯編（1）』247–248. 昆明市：雲南人民出版社.（表１）

郭思九（整理）陶学良（整理）（1981）「民族的来源」雲南省民族民間文学楚雄・紅河調査隊（捜集・編）『査姆』73–75. 昆明市：雲南人民出版社.（表１）

黒澤直道（2007）「口語によるナシ語テクスト資料」『ナシ（納西）族宗教経典音声言語の研究：口頭伝承としての「トンバ（東巴）」経典』135–196. 東京：雄山閣.

新克（捜集整理）（1985）「天神的唖水」陶立璠編・李耀宗編『中国少数民族神話伝説選』119–121. 成都市：四川民族出版社.

沈伍己（供述）・郭志誠（記録整理）（1985）「洪水潮天的故事」陶立璠編・李耀宗編『中国少数民族神話伝説選』160–174. 成都市：四川民族出版社.（表１）

馬学良編著（1984）「天上神人和地上神人」『山茶』20–25. 上海市：上海人民出版社.（表１）

馬学良編著（1993）「基諾族的大草房」『山茶』２：59–60. 上海市：上海人民出版社.（表１）

Rock, Joseph F. 著・村井信幸訳（1978）「Mo-so（Na-Khi）族の文献中の洪水神話」『中国大陸古文化研究会』８：47–63.

和志武（整理）・君島久子（共訳）・新島翠（共訳）（1980）「人類遷徙記」『中国大陸古文化研究会』９/10：17–31.（＝和志武（翻訳整理）（1985）「人類遷徙記」陶立璠編・李耀宗編『中国少数民族神話伝説選』66–85. 成都市：四川民族出版社.）（表１）

参考文献

伊藤清司（1980）「眼のシンボリズム」『中国大陸古文化研究』9/10：81–90.

伊藤清司（1991）『昔話伝説の系譜：東アジアの比較説話学』東京：第一書房.

井上順子（2015）「中国の洪水神話における兄妹婚神話の位置付けと構造分析」『史学』85（1–3）：51–75.

大林太良（1975）『神話と神話学』大和書房.

斧原孝守（2002）「中国大陸周辺における文字喪失神話の展開」『東洋史訪』８：1–10.

折口信夫（1938）「日本文学における一つの象徴」『新日本』１（6）.

川谷真（2018）「「物言わぬ子」と異類婿」『比較民俗学会報』38（3）：11–20.

君島久子（1978）「納西（麽些）族の伝承とその資料：「人類遷徙記」を中心として」『中国大陸古文化研究会』８：4–16.

君島久子編（1989）『東アジアの創世神話』東京：弘文堂.

末森明夫（2018）「〈痖〉の symbolism に関する予備的考察：中国西南少数民族・民族起源神話と記紀神話をつなぐ〈痖〉話素」『聾歴史研究』77：1–7.

末森明夫（2019）「「ものいわず」の形式・意味・用法の拡張における異界メタファー」『聾史会報』59：21–27.

竹沢泰子編（2005）『人種概念の普遍性を問う：西洋的パラダイムを超えて』京都市：人文書院.

多田元（1997）「物言わぬ子」大林太良ほか監『日本神話辞典』302–303. 大和書房.

中村一基（1990）「沈黙論：研究ノート（1）」『岩手大学教育学部附属教育工学センター教育工学研究』12：107–118.

新島翠（1994）「西南少数民族の誕生と成人の儀礼：納西族及びその周辺諸民族の事例」『聖徳学園岐阜教育大学紀要27：349–358.

野本敬（2019）「イ族支配階層の漢文化適応」『アジア遊学』231：212–215.

藤崎康彦（2007）「ナバホ族創世神話の中のナドレ：宇宙観とジェンダー研究序説」『跡見学園女子大学文学部紀要』40：17–36.

百田弥栄子（1981）「伝承に見る中国西南少数民族の創造神管見：雷神、龍神、天鶏、天狗に関連して」『民俗学研究』46（2）：189–207.